まじかる☆ないと

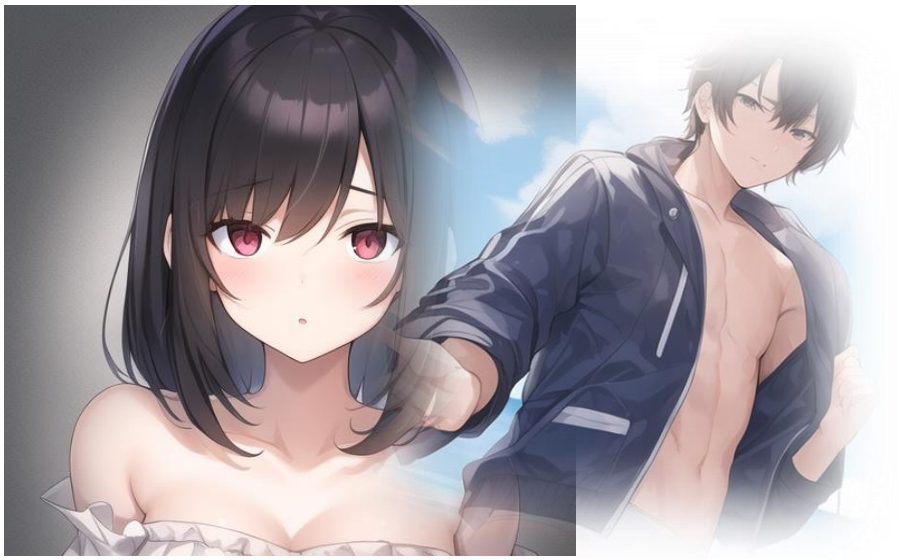
第５部：魔王再会編

　肉体に別の者の魂を入れるインサート・ソウルを使用する三銃士オリビア。これは彼女にタカとアイリーンが出会う前の、後の人々に好印象を広めることになった ２つのお話である。

第０章外伝：少女は美しく逞しく

　水泳部のアインは練習中に倒れそのまま突然死してしまった。ときを同じくして、いじめを受け衰弱死した女の子ソーンがいた。オリビアは、生きたいという強い意志を持ったアインの魂を、ソーンの了承を得てそのカラダに宿らせようとしていた。

ソーン：（あたしのカラダはアインさんが使ってください。ただお願いがあります。お父さんとお母さんを悲しませないようにしてください…あとあたしを虐めてた人も恨まないようにして…）



アイン:「ソーンちゃんのカラダ、大切に使わせてもらうよ。君のお父さんとお母さんも大切にする！君を虐めていた子たちが悔しがるくらい可愛い水泳選手になって活躍してみせる！」
ソーン:（ありがとう。アインお兄ちゃん、そしてオリビアお姉さん。もっと早く別の形で会いたかったな…あたしになったアインお兄ちゃんの活躍…天国で楽しみに見てるね…）
　ソーンの魂は笑顔でそう言うと消えていった。オリビアはソーンの魂が消えるのを切なさそうに見つめ、アインの魂をソーンの肉体に憑依させた。ソーンの肉体に生気が戻り、自信に満ち溢れた表情に変わった。

アイン in ソーン:「こんなに親思いの優しい子が犠牲になるなんて…俺、ソーンちゃんとして魅力的な女性になるよ。オリビアさん、俺にチャンスをくれてありがとう！」
オリビア:「ソーンちゃんも生きる意志を持っていたら、代わりにあなたのカラダに憑依させてあげたのだけど……アイン君、あなたがソーンちゃんのカラダで有意義に生きることで彼女も喜ぶと思いますよ…」

　それからアインinソーンは何よりも両親を大切にするよう努めた。アインが乗り移ったソーンは、明るく前向きに、そして女の子のコーデも勉強して、学校でも評判の美少女となった。
いじめっ子:「ソーン。最近のあんた、生意気ね…そんなに目立つと今まで以上に虐めるわよ！」
アイン in ソーン:「俺…いや…私には夢ができたから、前みたいに虐められても私は悲しまない！絶対に諦めないんだから！」

　ソーンとなったアインは、その強い意志と行動力から周囲から頼られる存在となっていった。ソーンを虐めていた者たちも態度を改め彼女を虐めることもなくなり、今では彼女の応援団の中心となっている。スポーツなどしたことがなかったソーンは体力はなかったが、水泳の練習も欠かさず、国で１、２を争う美少女アスリートとなった。
ソーン:（ありがとう…アインお兄ちゃん…）

第 0 章外伝:想いは歳を超えて

スーは 42 歳の女性で 26 歳ホストのトレスに片想いをしていた。しかし、トレスはスーのことを恋愛対象としては見ておらず、スーの情熱的なアプローチには困惑していた。スーはトレスを独占したいという想いからトレスに告白し結婚を前提とした交際を申し込むが、断られてしまう。絶望したスーは、自分とトレスのグラスに睡眠薬を入れ、無理心中を図ったのだった。オリビアはその場に駆けつけ、魂となった 2 人に状況を説明した。

オリビア:「あたしは三銃士のオリビア。あなたたち 2 人は意識を失って魂の状態となっていて間もなく亡くなります。その前に、スーさんはトレスさんのカラダに、トレスさんはスーさんにカラダに乗り移れば息を吹き返すことができます。どうしますか?」

スー:(あたしがトレス君のカラダに乗り移って…)

トレス:(…僕がスーさんのカラダに入る…)

スー:「あたしはいいわよ、トレス君のカラダを自分のものにできるから💕」

トレス:(僕は女性になりたいとは思ってなくて…)

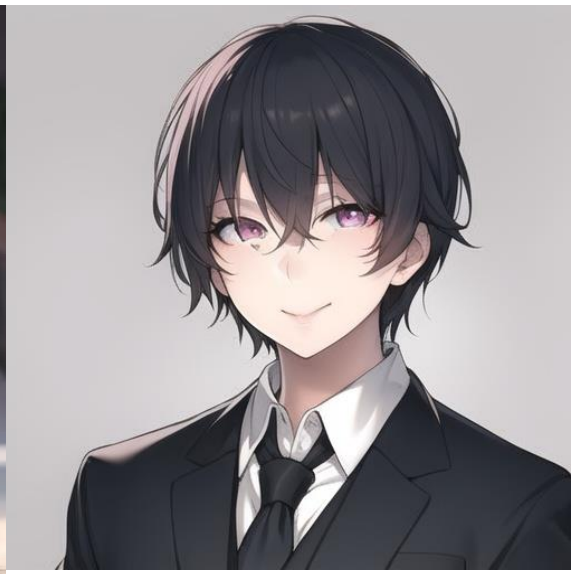
オリビア:「あら…女性の良さをわかっていらっしゃらないようですね…まあ、お試し期間ということで…インサート・ソウル!」

トレス:(…ちょっと待って!僕は…あ…)

オリビアはトレスの魂を強制的にスーの肉体へと乗り移らせた!

スー:(ありがとうございます!オリビアさん。あたしはトレス君のカラダに憑依すれば良いんですね💕)

オリビア:「ええ…あなたのカラダになったトレス君を、トレス君になったあなたが可愛がってあげてくださいね💕 そうすればあなたが想うような関係を築くことができます。では行きます!インサート・ソウル!」



トレス in スー:「んん…僕は…ああ…この髪…胸の存在感…僕はスーさんになったんだ…」
スーin トレス:「やったわ！これでトレス君は永遠にあたしのもの💕」
　スーが憑依したトレスは元の肉体の瞳と同じピンク色となり、スーの雰囲気そのままの表情となって生まれ変わった。その表情はとても満足そうで幸せそうだった。一方、スーの肉体に乗り移らされたトレスの瞳はブルーに変わり、とても不安そうな表情になった。
スーin トレス:「トレス君、あたしがたっぷり可愛がってあげる💕そのカラダの気持ち良いところはあたしが一番わかってるから…あたしもまだまだ女として魅力的だってことをわからせてあげるわ。」

　そして 30 分も経たないうちに…
トレス in スー:「ああ…スーさん…大好き💕僕、なんて愚かだったんだ…スーさんにこんなに愛されていたのに拒絶してしまったなんて…」
スーin トレス:「わかってくれて嬉しいわ💕トレス君。ずっとあたしのカラダであたしと一緒にいてくれる？」
トレス in スー:「はい💕ふつつかものですが宜しくお願いします💕」

第 33 章:忍び寄る影

オリビアの元で 3 箇月ほど修行を続けた結果、俺は風系、土系の上位魔法に加えて、彼女の得意な時魔法、精神操作系魔法を習得した。アイリーンも火系、水系の上位魔法はもちろん、エメラルドブレイド、ギガブレイドを極め、オリビアからは弱体魔法を教えてもらい、自らの剣技と組み合わせて深化させた。魔王がエレナに憑依してから半年あまりが経ち、俺たちは元のカラダのときの実力を遥かに超える実力を身に着けていた。

タカ in アイリーン:「オリビア姉さま…俺…私たち、だいぶ成長したでしょう?」
オリビア:「そうですね…二人同時に相手をすると、あたしでも勝てそうもないです。」
アイリーン in タカ:「アルテマ対策も教えてもらったし、オリビアさまさまね。」
オリビア:「アルテマを封じたとしても魔王さまの魔力は強大です。」
タカ in アイリーン:「うジャはそれほどまでなのか…それにうジャの目的が俺たちと共通だとしてもエレナに乗り移らせたままにはできない。やはりウルティマ城に乗り込まないと…」
アイリーン in タカ:「そうね。残る三銃士というのも気になるわね。」
オリビア:「残りの三銃士の名前はルシア、水と聖魔法を扱う最も忠誠心のある三銃士と言われています…」

～ウルティマ城～

その頃、魔王うジャの居城ウルティマ城では…

うジャ in エレナ:「スルトは単独行動で敗れたが、オリビアは上手くやっているようだな。アイリーンたちも目覚ましい成長を遂げたようだし、そろそろここへ来る頃か…」
　うジャ in エレナは、ウルティマ城の玉座に座りあれこれと考えていた。そこへ正体不明の影が忍び寄る。その異様な気配に気づくうジャ in エレナ。そしてその影の正体を見て驚く…
うジャ in エレナ:「！お前は…まさか…」
　その影は魔法を詠唱しうジャ in エレナに向けて放った。不意をつかれたうジャ in エレナを魔法が直撃する。
うジャ in エレナ:「なぜ…お前が…ル…」
　うジャ in エレナは一瞬で意識を失いその場に倒れ動かなくなった。その影はそれを見届けるとうジャ in エレナに代わって玉座に座った…

～オリビア宅～
　俺とアイリーンは翌朝、魔王のいるウルティマ城を目指すことにした。
オリビア:「テレポは自分が行った場所しか行けないから、あたしが一緒に行ければいいんでしょうけど…」
アイリーン in タカ:「オリビアはここでやることがあるようだからあたしたちのことは気にしないで。」
タカ in アイリーン:「そうだね。急ぐ旅ではないので…では俺たちは行きます。」
　俺とアイリーンはオリビア宅を出た。
オリビア:「気を付けてね。」

第 34 章:give＆take
　オリビアは 2 人を見送ると、キッチンに立った。
オリビア:「二人の成長を見届けたし、あたしは人間の魂入れを続けるかな…だいぶ実績もできてきたし、これなら魔王さまの目的にも近づいているはず…」
　そんなオリビアに影が忍び寄る。異変に気付き振り返るオリビアを聖魔法ホーリーが襲う。
オリビア:「そんな…どうして…」
　オリビアはその者を正体を一瞬見たが、すぐに意識を失いその場に倒れた。

　強力な魔力を背後に感じた俺たちはすぐに家の中へ引き返した。キッチンが破壊され、床にはオリビアが横たわっていた。
タカ in アイリーン:「姉さま！」
オリビア:「油断…したわ…まさか…」
アイリーン in タカ:「何も言わなくていいから！ゆっくり休んで！」
　俺とアイリーンはオリビア姉さまを寝室に運びパジャマに着替えさせた。

オリビア:「大…丈夫…あたしの肉体はそう簡単に死なないから…でも…確かめないと…動ける別のカラダに乗り移って…あたしも…ウルティマ城に連れて行ってください…」
タカ in アイリーン:「オリビア姉さま！わかりました！憑依魔法を使うのですね。でもテイクソウルは憑依者と別の性別のものにしか使えないので…」
オリビア:「タカ君、お願い！誰かカラダを借りてきてあたしに憑依の魔法を使ってください！」

タカ in アイリーン:「お姉さまがお兄さまになっちゃうのは嫌～！！」
アイリーン in タカ:「落ち着いて、タカ！一時的なものでずっと、って訳じゃないから。でも肉体を変えるならオリビアが気に入りそうなイケメンがいいわね。」
　オリビアは無言で頷くと再び意識を失った。
タカ in アイリーン:「そうだな…あと一時的とはいえ、カラダを奪われる男の魂も姉さまに乗り移られている間に消滅しないようにオリビア姉さまのカラダに入っていてもらおうか。」

　俺たちはテレポで首都エトワールに向かった。アイリーンがオリビア姉さまの好みの男を見つけると、俺のチャームの魔法でその男を虜にしてオリビア宅に戻って来た。
イル:「ええと…ここは…？」
　イルと名乗るその男のチャームを解くと、部屋の片隅で怯えていた。
タカ in アイリーン:「すまない…お前に罪はないけど、オリビア姉さまの入れ物になってもらう。姉さま、この男でいかがでしょうか？」

オリビア:「ええ、あたし好みのいい男だわ…流石ね。アイリーン。」
イル:「アイリーン？…！その緑の髪…あの魔女の…助け…」
　イルは立ち上がり逃げ出そうとする。
タカ in アイリーン:「俺は聖魔女タカだ。テイク・ソウル！」

第 35 章:body change

　イルは魂を抜かれてその場に倒れる。次に俺はオリビア姉さまにもテイク・ソウルを使い、魂を取り出す。イルとオリビア姉さまの魂が肉体から抜け出て空中を彷徨っている。次に俺はオリビア姉さまの魂をイルの肉体に、イルの魂をオリビア姉さまの肉体に入れるため、インサート・ソウルを発動する。

　イルの肉体にオリビア姉さまの幽体が乗り移り、完全にそれが重なるとオリビアの幽体はイルの肉体に吸収され見えなくなった。オリビア姉さまの肉体にもイルの幽体が同じように入り、2 つは合体した。意識を失っていたそれぞれの肉体が目を覚ます…
　イルの肉体は女性特有のピンクのオーラを、オリビア姉さまの肉体は男性特有のブルーのオーラを放っていた。

オリビア in イル:「成功ですね！さすがあたしの一番弟子のタカ君。あなたのお陰ですよ。」
タカ in アイリーン:「ありがとうございます！」
アイリーン in タカ:「オリビア、どう？男のカラダは？女とは違うでしょ？」
オリビア in イル:「そうですね…胸が軽くてブラジャーに包まれていないのがちょっと不安になるのと、股間にぶら下がっているものが落ち着かない感じですが…あたし好みの殿方を自由に操っているという優越感があります！」
アイリーン in タカ:「そうでしょ？やっぱり男のカラダの方がいいよね～。」
タカ in アイリーン:「いや、女だ！女のカラダの方がいい！」

イル in オリビア:「あの～僕はいったい…え？僕がいる？…あ…カラダが動かない…」
オリビア in イル:「ごめんなさいね。あなたとあたしのカラダを入れ替えさせてもらったのです。あたしはあなたのカラダに、あなたはあたしの女のカラダになっています。」
イル in オリビア:「僕が女性に？…痛っ…」
オリビア in イル:「あたしのカラダはダメージを受けていますからあまり動かないでくださいね。用を済ませたら元に戻りますから安心してください。」

タカ in アイリーン:「どうだ？オリビア姉さまのカラダは？」
イル in オリビア:「ない！」
イル in オリビアは自分の右手で股間に触れ、そして左手で胸に触れ…
イル in オリビア:「ない…」
オリビア in イル:「ちゃんとありますから(怒)今からそれを証明してあげますね💕」
オリビア in イルはそう言うと、イル in オリビアの着ているパジャマを丁寧に脱がせていった。

第 36 章:コンセンサス
オリビアの華奢な肢体が露わになる。
オリビア in イル:「ほーら、服を脱ぐと自分が女性であることを自覚できるでしょ。おっぱいもちゃんとあるでしょ？💕そして…」

オリビア in イルは、今は自分のものとなったイルの、男の手で元のイル in オリビアのおっぱいを鷲掴みした。
イル in オリビア:「はうぅ…」
オリビア in イル:「なかなかいい反応です💕大きい方が感じるとは限らないんですよ。ね、アイリーン…」
アイリーン in タカ:「そうよ！大きい胸の女性が魅力的とは限らないんだから！」
タカ in アイリーン:「アイリーンが言うと説得力がないな…」

イル in オリビア:「胸が小さいことが嫌なんじゃなくて、僕は別に女の人になりたくなんか…」
オリビア in イル:「まあそう言わずに何事も経験ですよ。それにあなたがこの肉体交換に満足していただけないと魔法は１時間ほどで強制解除されてしまうのです。今からあたしのカラダの性感帯を教えますから、たっぷり快感の波に溺れてください💕」

オリビアはそう言うと、イル in オリビアの肉体を慰め始めた。まずは胸から…緩急をつけてその膨らみを揉むと、弾力のある胸はそれに呼応してぷるんっぷるんっと揺れた。初めて女の肉体を経験するイルにとってそれは刺激的だった。

イル in オリビア:「あ…ああ…僕が僕に愛撫されている…」
オリビア in イル:「遠慮せずあたしのカラダ…たっぷりと堪能してください💕」
イル in オリビア:「僕、男なのに…んあ…は…声が止まらない！気持ちいい…」
タカ in アイリーン:「女のカラダの方がいいだろ？」
イル in オリビア:「はい…オリビアさんのカラダ…良すぎます！」
オリビア in イル:「胸だけでそんなに悦んで貰えて嬉しいです！ではサービスしちゃいますね💕さあ、お股を広げてください。」
イル in オリビア:「はい…」

イル in オリビアは、恥ずかしそうに両足を広げ、その股間を俺たちに見せつけた。イルとなったオリビアは、胸にあった手をイル in オリビアの股間へと這わせる。

オリビア in イル:「ふふっ💕お漏らししちゃいましたか？」
オリビアの股間は既にしっとりと濡れていた。
タカ in アイリーン:「初めてでこんなに濡らしちゃうとは…オリビア姉さまのカラダって…こんなにエッチだったんですね。」
オリビア in イル:「あたしのカラダのせいじゃないですよ。イルさんがエッチなんです💕」
イル in オリビア:「ああん…はあん…やんっ💕」

第 37 章:哀しみの連鎖
オリビア in イル:「一人でも楽しんでくれそうですね。双方合意ってことで魂交換の魔法成立です！あなたのカラダ、あたしが使わせてもらいますよ。」
イル in オリビア:「はい💕僕のカラダ、オリビアさんの自由に使ってください！その代わり…」
オリビア in イル:「ええ…そのカラダはあなたのものです。あなたもご自由に使ってください。」
アイリーン in タカ:「セルフで物足りなくなったらあたしがお相手してあげるわ💕」

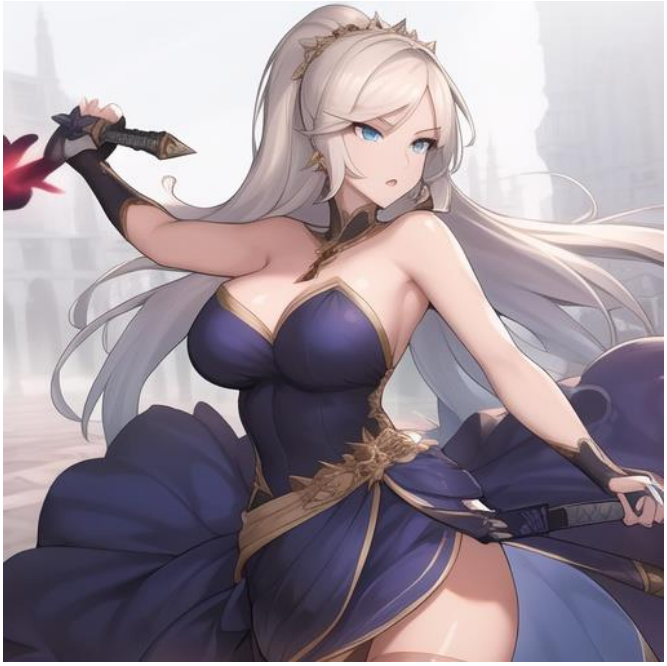
オリビア in イル:「さて…今のあたしは魔法を使えませんから、タカ君のテレポで一気にアルテマ城へ行きましょう。あたしの頭に手を当てウルティマ城のイメージをとらえてください！」
俺はオリビア姉さま in イルの頭に手を当てた。
タカ in アイリーン:「把握しました！ウルティマ城の位置。では行きます！アイリーン、手をつないで！」
アイリーン in タカ:「ええ、お願い！タカ！」
タカ in アイリーン:「テレポ！」

～ウルティマ城～
オリビア in イル:「無事着いたようね。さあ、魔王さまのいる玉座へ案内するわ。」
ナターシャ:「待ちなさい！」
そこに女性が立ちはだかる。
オリビア in イル:「ナターシャ？何故あなたが？」
ナターシャ:「スルトの仇は取らせてもらうわ！」
アイリーン in タカ:「オリビア、この人は…？」
オリビア in イル:「スルトのフィアンセよ…」
タカ in アイリーン:「そうか…」

オリビア in イル:「ナターシャ…この人たちは魔王さまの敵ではないわ。」
ナターシャ:「わかっている…スルトも武人として潔い最期だったと聞いている…でも…」
ナターシャは魔法を詠唱する。だが…繰り出す魔法はお世辞にも強力とは言えず俺たちにダ

メージを与えるレベルではなかった。それでも必死で俺たちに向かってくる。この人にとってスルトはかけがえのない存在だったのだろう。俺も同じ境遇であれば同じことをするだろう…
アイリーン in タカ:「タカ…」
タカ in アイリーン:「ああ…わかっている…この人に説得は無理だ…」

タカ in アイリーン:「サイレンス！」
俺はナターシャの魔法を封じた。だがナターシャは短剣を握りしめて俺たちに向かってくる。



アイリーン in タカ:「ごめんね…ナターシャ…」
アイリーンはナターシャに強烈な腹パンを入れる。その場にうずくまるナターシャ。だがそれでも必死に短剣を握り、俺たちに敵わないとわかると自らにそれを突き刺した。辺りに鮮血が飛び散る…
アイリーン in タカ:「そんな…」
オリビア in イル:「ナターシャ！」
オリビアがナターシャの元に駆け寄る。だが既に意識はなく、オリビアは首を横に振る…俺は覚悟を決め、1日1回しか使えないある魔法を発動させようと準備した。

　オリビアの目的は、人間との関りを深めて人間たちから信頼を得ることのようです。トムとジェリーに続き、ソーンちゃんも自分の肉体を新たな持ち主に託していました。

　魂入れ：インサートソール、魂取り出し：テイク・ソウルは作中で語られているほか幾つか制限（自分に使えない、自分より弱い相手にしか効果がないなど）があるものの、強力な魔法で人間世界で使われたらかなりの混乱となりそうです…オリビアは人間と仲良くするということで、肉体の持ち主の了承をもらっているようですしね。あなたは自分の死が確定したときに見ず知らずの異性に自分の肉体を差し出すことができるでしょうか？或いは自分が生き返るために見ず知らずの異性の肉体に乗り移ることができるでしょうか？

　さて次の第 6 部が最後となります。ラストでタカが発動しようとしている魔法は今作最強のものです。残る三銃士、うジャとオリビアを襲った者の正体、エレナの安否、そしてアイリーンとタカの結末などお楽しみください！